
卒業式の跡

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

卒業式の跡

【Nコード】

N47280

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

初めて受け持った生徒の卒業式。その前の日に告白された。もちろん断ったけど、何故断らなくてはいけなかったんだろう。生徒だから？子供だから？

前に書いた「卒業遠足の今日」の続きですが、読まなくても平気だと思います。

「大人ってズルイ」そう思ったのはいつだったか。

確かなのはそのとき俺は大人じゃなくて、でも、子供でもなかったはずだ。

じゃあ、今俺は大人か？

大人と子供の境目は、なんだろう？

きつとこいつ等は大人になって、俺の知らないことを知って、
：きつと今を過ぎ去っていくのだろう。

俺は通過点になるのだろう。

：だから、その気持ちは受け取れないんだ。

明日は卒業式だ。

ほっと息を吐いた。

初めて請け負った担任の仕事。

その初めての生徒達が明日、卒業するのだ。

長かったような、短かったような。

うん。楽しかったな。

「先生」

職員室から出てテニス部の様子を見に行こうとして、生徒に呼び止

められた。

もう卒業式の予行練習もとっくに終わって、残っている生徒はいないかと思っていただけに少し驚いた。

「大野、どうした？」

卒業証書を名前を呼ばれ受け取るのは、一クラスに名簿順で5人まで。

俺は予行練習で大野が自分の名前が呼ばれ、ガチガチに緊張したように証書を受け取っていた姿を思い出し、思わず笑ってしまった。

「そう言えば、明日は右手と右足を一緒に出さないように気をつけろよ」

俺がそう言うと、大野が無然とした顔をして、

「先生も壇上の上にながってみてください。メッチャ緊張しますからね」

と言った。

「ところで、何かあったか」

ホームルームが終わって2時間ぐらい経っている。

何か用があったのかな、と思って聞いてみた。

「…先生」

大野は言いにくそうに、足を見つめたまま言葉をつむぐ。

「私っ！先生のことが好きです！！」

バッと顔を上げた大野は変に口を歪めて泣きそうな顔をしていた。

「えっ？」

冗談だろ？そう思った時には、大野は廊下を走り去っていた。

「は？」

「うわー青春ですねえ」

職員室から阿部先生が出てきた。

幸い、職員室には阿部先生以外いなかったようだ。

「阿部先生、勘弁してください。きっと罰ゲームか何かですよ」
青春映画みたいだ。そう思ったのは俺だった。

「そうですかねえ…」

まだ若い（と言っても俺より6歳年上）彼女は恋愛沙汰が面白いんだらう。

「あー…でも、内緒にしててくださいね」

俺は、ニコニコして誰かに言いたそうな阿部先生に言った。

「そうですね。きっと大野さんもその方が良いでしょうね！」

阿部先生はニコニコしながら約束してくれた。

やっぱり、部活の方はみないで帰らう。どうせ顧問じゃないし。

「僕は帰りますね」

職員室に残っている阿部先生に声を掛けた。

「お疲れ様です」

ウィーンウィーンとコピー機が音を立てている。

ドアに手をかけたとき、阿部先生がふと思いついたように言った。

「大野さんって、卒業遠足の時、一緒にまわってましたよね」

そうだ。卒業遠足のとき、俺が大野を（確か化粧が濃いついで）注意してる間に、大野が班員とはぐれて、一人になってしまった。

テーマパークの入り口で、一人でポツンと「参ったなあ」というように立っていた大野を不憫に思って、自分の所為でもあるんだし、一緒にまわったのだ。

「ま・たぶん罰ゲームだらう」

帰り道、学校から駅までの道のりを歩いている途中で、

俺は生徒からの告白という非現実的なことはアリエナイ！と結論づけた。

卒業式は順調に終わった。あっけないくらいに。担任からの一言は緊張より感慨深い気持ちの方が大きくて、目の奥がツーンとした。

三年間は短かったようで、長かった。

今振り返るとやっぱり早かった。

コマ送りのように春の遠足文化祭球技大会体育祭が三回廻って、入学したばかりのみんなに、初めて挨拶したときの、椅子に座ったズラッと並んだ顔を思い出して、

二年の修学旅行で生徒が万引きして、店の人に主任と謝りに行ったことを苦々しく思い出して、

三年の球技大会でクラス優勝を果たして、みんなに胴上げしてもらったことを思い出して、

昨日の大野の告白を思い出した。

朝も普通だったし、やっぱり冗談だったかな。

最後のホームルーム。

泣いている女子生徒もいるが、大体は晴れ晴れしく笑っている。今日のこの日になって言おうか、三年前から考えていた。

式で渡されなかった分の証書をみんなに渡して、最後に写真を撮った。

本当に終わったんだな。と思った。

大野が学校に来たのは、卒業式から三日後だった。

「せーんせ！」

職員室から呼び出され、「話しましょう」と食堂に向った。

何を話すんだろう…なんて本当は分かっていた。

でも、生徒と教師だ。卒業したとはいえ、答えは決まっている。

「先生」

階段を降りたところで、歩きながら大野が言った。

「先生はズルイ」

「なにが」

「都合の悪いことは返事もしない。大人ですね」

どう言っているかわからなかった。

大人ってズルイ。そう思ったことはあったはずなのに、いつだったか思い出せない。

「なあ、大野。お前がこの前のことを言っているんだったら、俺はダメだぞ。」

「なにがですか？」

大野は俺の顔を横からじっと見る。俺は目を逸らした。

「なにがって…卒業式の前の日のことだろ…」

「違います。なにがダメなんですか？」

大野は足を止めた。俺もつられて歩くのをやめる。

「もう私は生徒じゃない。先生も担任じゃない。ダメなことなんてないです」

俺は言葉を探した。

どう言えば伝わるのだろう。

女として見れない？

何か違う。

「大野のことは嫌いじゃない、けど…」

食堂まであと少し、もう少し先まで、この話は待てなかったのだろうか。

「…うん。分かりました」

突然、吹っ切れたように大野は言った。

「私が大人になったらもう一回言います！」

にっこりと笑って、続ける。

「私が大人になるまでに、上手い断りの言葉を見つけないでくださいね」

また歩き出した大野の後ろを、啞然と見ていた俺は慌てて後をおう。
「大人って、どのくらい経ったら大人なんだ？」
聞いた。

「薬剤師の資格取ったら、報告も兼ねて、また告白します。」
大野が薬剤師を目指してる。

薬科大に受かるかどうか、合格通知を受け取るまで悩んでいた。
卒業遠足のあの日も、そのことを少しだけ話した。

前を見つめる大野の顔は分からなかったが、また泣きそうになって
いるのだろうか。

俺は告白の響きにちよつとドキドキして、

「そうかー」

なんて言いながら、頭を掻いてみた。

「あ・そうだ。メルアド教えてください」

もうすぐ食堂が見える、そのときに、大野が振り返って言った。

「この前は、生徒に教えるのは禁止されてるからダメだーって言っ
てましたけど、もう卒業したし」

「そうだなあ……いいよ」

俺はさほど考えずに答えた。もう卒業生だもんな。

俺は、携帯を取り出した。

「やった！一番!!」

赤外線送信し終わって、大野がケータイを抱きしめてジャンプした。
そんなにうれしいか……一番って？

その答えはすぐに分かった。

食堂の前には卒業したはずのみんなが待っていた。

「お前らー、集まるの早くねえかー」

俺の呟いた声が聞こえたのか、大野が隣でクスクスと笑っていた。

まだまだこいつ等の世界は広がっていく。

色んな奴と出会い、色んな事件があって、色んな生活をして、俺の知らないうちに大人になっていくんだろくな。

俺がそうであつたように。

大人か。こいつ等が大人になるまでに、俺はちゃんとした大人になつていけるのだろうか。

長いような、短いような。

未来までの時間を思つて。

楽しみだ。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

前作とは違う視点なので、「卒業遠足の今日」とは違うお話として書きました。

大人ってなんなんでしょうね。

私の周りの大人はみんなイイヒトで、大人の見本って感じの人ばかりなのですが、

きっとその人たち一人一人が、色んな体験をしてそうなったんでしよう。

でもその人たち全てが、「自分は大人だ」と思っているわけではないのです。

自分のことが未熟だなとか、子供っぽいなあと思いながら大人の役目を果たしているというか…

そんな無条件でやさしくしてくれる大人に、子供は（特に乙女は）惚れてしまうわけで。

大人にしてみれば、自分が大人の役だから、惚れてしまってるだけで、社会にでたら、素敵な人はいっぱいいるよ！

なんて思っているかもしれないですね。

私は教師との禁断の恋、好きですけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4728o/>

卒業式の跡

2011年10月8日01時14分発行